

212

181

八坂社舊記集錄

下中

八坂社舊記集錄中卷

繁繼謹撰



巷社之説 並舊傳 今云牛王地社又古宮元祇園と云く

此社延長四年六月二十九日甲寅山階寺の僧修行の建立

小^たて祇園天神堂と名附^な也其傍小薬師堂を副立^たて其

と觀慶寺と稱ひ^ひハ常住寺の別當仲尹^{ちゆういん}を建立^たり事日

本記畧 第十 三卷 萬壽三年十二月九日辛巳未刻中宮御産事

第一の 前日入道前太政大臣令主計助加茂守道并野寺別

當仲尹 觀慶寺別當 令^し占男女之處守道ハ申男子仲尹ハ申女子

と^り了上の仲尹の字の傍小觀慶寺の別當と有^りる小て明

白也此條の野寺ハ常住寺の事也拾芥抄ハ野寺ハ常住寺也本尊ハ藥師拍原ヨリ有リ野寺ハ元
大和國奈良小有り日本後紀第一卷延曆十五年十一月戊子
朔辛丑始用新錢云々施七佛寺及野寺又第三卷延曆二十
四年八月丁酉朔乙巳於野寺天台院令受新寫天台教文と
有リハ奈良の野寺也延曆十三年遷都の後山城國拍原小
移舊小依テ野寺と呼とも本名ハ常住寺ときこえ
リ三代實錄第四十五卷元慶八年三月壬戌朔十五日丙子夜
大雷雨一て震常住寺塔火自第五層起て延燒講堂金堂鐘
樓經藏步廊中門一時小蕩盡又第四十七卷仁和元年四月
乙卯朔村國連春澤申云為親母欲修小善向常住寺云々又

延喜式第三十三卷

大膳職

聖神寺季料常住寺准此云々又第四

十卷

主水司

常住寺佛聖二座季の料米并正月十五日七種

粥料一同聖神寺と有り日本記畧第二卷天慶三年三月十

日丙子野寺の四王院火又上小舉と第十卷萬壽三年の

條ハ野寺別當仲尹の野寺々山城國拍原の常住寺の支也

拾芥抄ハ野寺ハ常住寺本尊ハ藥師拍原と又之より拍原

ハ延喜諸陵寮式ハ拍原の陵ハ平安宮御宇桓武天皇也在

山城國紀伊郡兆域東八町西三町南五町北六町加丑三角

二の峯一の谷と有りて今も深草郷谷口の西の野を拍原

野と云也と

總當りら猶日野村各了内裏芝又日野藥師の從來を尋ねへき礼り然て常

住寺の別當仲尹る祇園の神宮寺として觀慶寺を建立す
る所以も其平常より從ひ仕ふる藤原道長深く祇園社巷を信
一參詣日本記畧第十一卷の卷に有り道長も所謂法成寺入道前大臣法
成寺本尊も藥師ふも道長平常小深く信仰し祇園小
藥師堂を建立て大年神の本地佛と為る礼り蓋蓋内傳
よ八王子一も總光天王大歲神本地藥師如来と有り九て
皇國の神祇小本地佛を配立るハ慶命より創まれり同
山僧よても慈鎮ハ誠ハ神を佛のちハ一跡を垂る
と何故小言と詠り今論ふ限り何ら次祇園の藥師堂を
觀慶寺と號けハ同卷に寛仁三年三月廿一日前太政太

臣從一位藤原朝臣道長落飭入道年五十四法名行觀後改
行覺と有り時より後萬壽四年十二月以前に道長の法名
行觀の觀乃字と權僧正慶命の慶の字と合せて用ひ其藥
師堂の號を附ふる慶命ハ長元元年六月十九日より天台座主と為り然り二
十二社註式に朱雀天皇兼平五年六月十三日の官符云應
以觀慶寺為定額寺宇祇園寺在山城國愛宕郡八坂郷地檜皮
葺三間堂一字安置藥師如来一體脇士菩薩二體八將神八
躰觀世音地藏各一躰大般若經一部六百卷檜皮葺一字有鹿
面四神殿五間檜皮葺一字天神婆利女八王子五間檜皮葺札
堂一字右得山城國解倂故常住寺十禪師傳燈大法師位圓

如去貞觀年中奉為建立也云々といふ文を載せしむるハ極
多る非夏也此官符承平年中の物ハ非也承久以後乃偽作
す。九て六箇の明証なり寛仁年中ハ草創したる藥
師堂一名觀慶寺ハ承久二年まで巷社の地ハ有リ夏百練抄
第十二卷ハ承久二年四月十三日壬申丑刻祇園社焼亡御
殿并東南廊南大門藥師堂已下皆為灰燼と有り藥師堂一名觀慶寺
南大門西大門の内ハ在らぬ南大門より南の方一
町半巷社の側ハ有リ故ハ小神殿并廊を言て南大門より巷
社ハ至る間の在家等を已下の二字ハ牢籠こわごまて言へる也感院とも兼曆三年より以後ハ祇園社と云ハ常の夏也其故ハ下ニ詳ク言へリ承久二年七月一日

感神院の神殿已下廻廊大門等上棟有りて十二月廿五日
遷宮あり明年より今小路の路岐なる巷社觀慶寺とも再
び建つ趣きを明年四月八日の夕より洛中物念ものねんしく重き
夏已ハ定りたる趣よて六月十三日十四日宇治川の戦ハ
軍利あり此所謂承久の大亂よて世間の貴賤神社佛寺と
造營むべき力なきに随ひ當社社務感圓の熟じやくく計りて感圓
ハ永保年中當社有衆の社務やうら僧形と成り行圓の
玄孫よて建曆元年四月八日十二歳よて父晴圓のゆづり
を受て大別當と成り承久三年ハ九二歳の時ハ當り其父
晴圓五十五歳の時あり晴圓の女子感圓の妹ハ七條女院
常陸局 感神院本社の西小假初ある草堂を立て承久二年
小焼亡多る南樓門の南ある路岐の藥師堂の本尊と安置

しそよりハ觀慶寺の額を掲げしるれり感神院の社務別
當ふる行圓此行圓ハ永保年間の人なり兼久ハ八年ハ永保より百三十年後なりる世よりハ
祇園天神堂の別當別々感神院も祇園藥師堂もこれ
感神院別當兼帶かまハ最も諾なりる處ところ分ぶんもそ有りけり巷
社も祭る神も感神院も祭る神も同神なりれも別々假殿と
も作らる巷社の地はハ多く跡計りの標を置いてこれと古
宮の地と云又牛王地社といふ是頃より祇園の名益高く
あり感神院も一名と成りて感神院の外別々祇園から然
れと其ハ兼久以後よりの更はこそ有き兼平五年ハ未
觀慶寺なり兼平五年より後八十餘年を歴てこりて觀

慶寺藥師堂ありしと既上ふ説へるる如し兼平五年の跡
と標して兼久以後の趣と記し更兼久近き年間も尚其
更はりしらら決て應永以後の偽作也是第一の明証也
又九く諸臣諸民の私に建立しるる寺院を昇して官寺額寺
と為る最も重き更はり故に歴代の正史實錄編年世紀に
各その定額寺と成り多る時日名跡を記して洩さししれ
此を扶桑畧記日本記畧百練抄等に兼平年中の更を記し
多る中小孰も觀慶寺と定額寺と為るの文を一しこれ此官符
偽作れる第二の明証也又南朝の北畠親房卿の二十一社
記祇園の條下に此偽り官符の事を舉げ應永以後の二十

二社註式は初て此文と載多しハ南朝北朝の頃いす此
文ぢりりにて是此官符偽作す第三の明証ありす
今昔物語は祇園別當良算と天台座主良源の支と記して
祇園ハ當時も山階寺の末寺ふて此後天台山の末寺と成
多る趣と記す天台座主慈惠僧正と有り良源ハ康保三年
八月天台座主ふ補せられ天元四年大僧正と為了康保三
年の兼平五年より三十一年後也其時ハ祇園ハ山階寺
の末寺也と有り其も祇園社の支也兼平五年ふも康保三
年ふもいす観慶寺也若兼平五年の比實ふ観慶寺
有りて當年ふ定額寺と成りては既に既く本寺とて山階

寺の末寺に何は是此の官符偽作すは第四の明証かり

又祇園寺ハ本とて観慶寺ハ祇園の末寺れ了ゆふ小字と

祇園寺と云祇園寺の名ハ此書のこれハ元亨教書第九

卷感進四の一ふも祇園寺の文有り其文畧之て兼久以前中路今小

路の路岐に有一時の支と云こえり其末寺たる観慶寺

三間之堂を専主として其元を五間の神殿と傍依

總名観慶寺とて別名感神院薬師堂の如く説ひ成むと欲

ふとも歴代正史實錄日月の天ふ嚴く如く山嶽の地よ

時は如く然ると註式の作者の意得ざりハ所謂賊と

引て内ふ入る甚も遺憾あり九て神社の官寺ハ本寺か

此支不及云各其神社と本と近く靈元天皇寛文七年丁未閏二月讚岐國豊田郡觀世音寺莊琴引八幡宮と雲邊寺地藏院と本末相論して就て將軍家嚴有御裁許状も又之を了くくかると然るに註式に記載せる官符冠履倒置本末逆施の文也是此官符偽作たる第五の明証也又藥師經は四譯有り劉宋の大明二年戊戌は惠蘭の譯せる藥師瑠璃光經是第一譯也其後百五十七年と歷て隋の大業十一年乙亥闍那笈多の譯せる藥師如來本願經是第二譯也其後十四年ふ當る唐の貞觀二年戊子玄奘の譯せる藥師瑠璃光如來本願功德經是第三譯ふて善珠も作たる藥師

經鈔ハ其本と註釋せるれり其後八十年ふ當る神龍三年義淨の譯せる藥師瑠璃光七佛功德經是第四譯也四本互ふ語辭の繁約文義の依正同かられども孰も十二神將の説也八將神は大歲神大將軍大陰神歲刑神歲破神歲殺神黃幡神豹尾神の八將神ハ漢國の陰陽家の説なり此官符藥師ハ八將神のハ須佐之男尊の八柱の御子と八將神ハ配當くさうふ從ひて其他と服侍の日天菩薩月天菩薩又觀世音地藏等とも附會し添ふる妄説也此官符偽作は第六の明証也尚言ふべき支多かまると兼平年中に觀慶寺一名觀慶寺初て建立し支明

白ふる上ハ其他ハ辨を待ばるを今暫く創粟はつむぎの人小煩ら
く指し示し多也感神院の社草創の夏ハ前巻ふも
云如く齊明天皇の二年乙卯八月皇大御國愛宕郡八坂郷
を伊利須イリヌ使主小賜オホタマヒひ感神院を建立て彼の最大牛頭山を
十有三前の大神等を齋奉し八坂郷の當社あたかふも鎮
坐し多まへりハ此大神の御心ミココロやふしハ此大神の御神魂
を鎮め給ひ大神の萬世の後まが明らけ給ふ威イササカの可畏く
違ひ奉るべらばらばるを知づハ坂造日置造等之祖伊利
之使主其御意を受奉りて當御社あたかハ南樓門西樓門を建つ
日本書紀第二十七卷天智天皇の六年辛酉朔己卯遷都于

近江ニ齊明天皇よりハある當時の夏は若此て近江

大津宮の朝ハ往來の道ふして花山の南の大路を経て汁
谷を越之感神院の南樓門ハ入と舊記ハも見えたり然く
要害の地ハ神社と建立ハ古昔の例多く有る中ハ日
本書紀第二十七卷ハ天武天皇元年七月初村屋神著祝曰
今自吾社中道軍衆將至故宜塞社中道故未經幾日廬井造
鯨軍自中道至時人曰即神所教之辞是也とあるハ天智天
皇六年丁卯より後正ハ六年ハ當了壬申年の夏ハれハ
當世の情狀思ひ合ハ故ハ當社の御榮ハ之松の葉の茂
り秀るハ如く花の開きハ若く成ハより當社南樓門

の南一町半おろ大路の西側ふ貞觀年中ふ常住寺圓如觀

慶寺を創め此寺旧跡今の下河原清井町南人家の後よ荒蕪の地有り伽藍の石ふと折と出ると云尚尋

昌泰年中河原左大臣の子仁康上人雲居寺を創め今

高臺寺是る延長四年山階寺の僧修行觀慶寺ふ就て祇園天神

堂を建立今の巷社一名牛王地社康保四年叡山坐主良源感神院の東

北の山ふ南禅院を草創む今の知恩院建久年中感神院の東

南の山ふ叡山の慈圓僧正安養寺を立今の圓山也又雲居寺の

東北ふ鳥羽天皇の皇女阿夜御前髪を薙て雙林寺の宮ふ

坐一圓山の南ふ長樂寺有り此ハ唐の天寶の末年ふ杜甫

了ふ人四川之潼州鄠縣か了牛頭山亭字ふ登りて路出雙

林外亭窺萬井中江城孤照日山谷遠含風兵革身將老関河

信不通猶殘數行淚忍對百花叢てふ詩を作りより牛頭

山の名高く為て唐書卷四十一地理志小記又明一統志の第

もふ又杜甫全集註杜甫ハ唐の先天元年壬子に生きた大

ハ天寶十四年ハ其四十四歳の時よて皇國の天平勝寶七

年乙未に當きり唐の牛頭山ハ此杜甫の詩より以前ハ

名もかき牛頭山在鄠縣形似牛頭四面孤絶上有長樂寺樓

閣煙花一方勝槩と言へり當社を其牛頭山ふ準へて唐の

山ハ台州唐興縣か了も潼州鄠縣か了も皆其山形の牛頭

ふ似とるより名附けとるより固り構撞樹を生する支も

大門の南の大路の往来雑沓あり故に延暦二十四年小
行殿延鎮汁谷の傍上に清水寺と創り也又西接門西の大
路の今の祇園町在家稠密なり一里ハ百練抄卷十五小記せる
寛元元年の頃鴨川四條橋の東境より今小路今の八軒月見町あり
南ハ綾小路今の安井也小至て在家六七百家有り一ふて掲焉
かり十年辛未十二月三日天皇崩御明年壬申の大乱あり
て天智天皇の次の御世を嗣ふまは帝大友崩御此更ハ水戸義公の大日本史に詳しく論ひ定てより次々みれ其説は従ひて人々の記せる物有り書紀の天武前紀も旧紀ハ大友帝の本紀かりけら一明治三年庚午の秋七月弘文天皇の尊諡を奉らる天武天皇大和國飛鳥浄御原宮小坐す一て御宇は十四年ハ伊利須の使主

初て來れり乙卯の年より正き一三十年不當る年ハ伊利須の景迹行能掲然といふも前の朝の今來と言ひ當世小為てよりに僅小十四年かれハ其家の姓氏を轉り上る也されらば故小奮のまくハ八坂造日置造と聽許し但その人々の景迹行能と考選て爵位を賜ひしれり伊利須使主八坂造の姓を賜ひし夏ハ日本書紀ハ天豐財重日足天齊天皇天明二年秋八月癸巳朔八日庚子高麗遣達沙等進調大使達沙副使伊利之捨八十一人高麗百濟新羅の我ハ足仲彦天皇蓋冲哀天皇の九年二月癸卯朔六日戊申ハ天皇崩御坐一皇后氣長足姫蓋神功皇太后その大御心と心として十月己亥朔三日辛丑和珥津より發して新羅國に到り給ひて新羅の國を従ハしめ給ふ夏書紀に有り

齊明天皇の御時小伊利之使主の皇國小留りて歸らばり

一夏明白れり又天命開別天皇天智五年春正月戊辰朔戊

寅高麗遣前部能妻等進調夏六月乙未朔戊戌高麗前部能

妻等罷歸冬十月甲午朔廿六日己未高麗遣臣乙相奄部等

進調此人も皇國に飯化し多るよて他日罷飯の丈か此

と罷飯了月日を記せり罷飯れ了月日と志るさげりハ

彼の馬嶺山の神託の夏伊利須ら牛頭山神と奉げて日本

小赴ける趣れと明白了る小就て高麗の苗裔別小渤海

國王と称ひて皇大御國小服屬て調を奉り夏續日本紀卷

十二神龜四年十二月の己下往々見えたりさて日置造ハ

高麗國人伊利須意弥男馬手裔孫表古君之後也新撰姓氏

十二左京諸蕃下高麗部見之より一本高の字の上は出

自の字よりて之後の二字か一本伊より以下後也また

の八字か一本君の字の下は之後の二字有り手或ハ王

日置造ハ高麗國人伊利須使主之後也姓氏錄卷第二十四

八坂造拍國人万留川麻乃意利佐之後也山城國諸蕃高麗

部の見えより一本拍の字の上は出自の字より又一本

の韓語あり山の高き所と替と呼ぶ趣かまハ万留川麻

馬嶺の義ら之留ふらハ周留と同言よて日本書紀天智

天皇元年三月の條ハ疏留城と云ふ地ハ伊利之使主本國高麗

十

牛頭天王の神祠此所より出たる氏族なる故也伊利須意利佐の佐須皆同一齒の音の轉

日置造出自高麗國人伊利須使主也

鳥井宿祢日置造同祖伊利須使主之後也

榮井宿祢日置造同祖伊利須使主男麻豆臣之後也

吉井宿祢日置造同祖伊利須使主之男麻豆臣之後也

和造日置造同祖伊利須使主之後也

日置倉人日置造同祖 右六條姓氏錄卷二十六和大國諸蕃高麗部見之

日置造鳥井宿祢同祖伊利須使主之後也 攝津國諸蕃高麗部見之

部見之

島木高麗國人伊和須使主之後也 姓氏錄卷二十八河内國

和の字ハ利の字の誤にて同書第二十四卷右京日置造條

一名伊和須と云ふ同利和互誤了古書多一本同書第

二十四は嶋岐史出自高麗國人能邪王也木一本は京左

大和攝津の日置造山城八坂造大和鳥井宿祢榮井宿祢吉

井宿祢和造日置倉人河内島木等の氏の子孫の皇國の人皆

八坂造の家と本宗とす故ハ伊利佐使主の家と兼續

令生とす子真手真卯兄弟ハ真手ハ八坂造の家と兼續

麻豆の子孫の氏ハ八坂造大和國の榮井宿祢の家と兼續

と姓氏錄第二十二卷左京日置造の家の本系帳ハ真手と作

一本は豆と書同書第二十六大和國榮井宿祢の條ハ麻

豆と作りて文字ハ各異と皆ハ讀べし真卯ハ本系

帳ハ賜日置造姓貫右京從五位上と有り續日本紀卷十九

の子孫の人々の支迹往々六國史等ニ散り見えたり右
 の日置造ハ此真卯が子孫かり真手の子と美濃子と称ふ
 姓氏録第二十二ノ若古ノ作りたり美濃子の子真鋸の子
 ハ右京日置造真卯の女子れり真鋸の子真虎真虎の子真
 網真綱の子真行真行ハ叡山の圓融房良真僧正ヨリ從ひて
 僧形とれり名と行圓と改め永保元年十月九日より家の
 傳のまゝと感神院社務執行職小棟一四十七年の間懈怠
 なく其職を勤む此より後世僧形よて法印法眼長吏推僧
 正ふと稱へ來も社務祠官ふる故男女の子孫昌盛え
 て行圓の子孫九て六門ノ及べり行圓の母ハ紀忠方より
 子かり故六門の中ハ社務家系譜と武内宿祢より
 記行圓と第七世孫紀長谷雄ハ至り長谷雄淑光文相忠方より
 行圓と次第と記有も其ハ忠方の女子と有方と寛印
 と三人有り寛印ハ天台碩徳内供奉と寛印の子行圓永
 保以前ハ祇園執行多り支つて行圓の僧形ふかり多
 りハ母方の行圓を勸め依つて行圓も母氏の姓と
 冒つたにも有べし紀氏ハもとより貴き氏姓から當社
 本統てハ八坂造本祖と鹿畧ハ為可ふち八坂造のハ
 坂ハ源順朝臣の和名鈔卷六山城國愛宕郡八坂地造のハ
 り郷の名よて造ハ皇大御國の上古より宿祢臣連伴造國

造おど數等の尸骨有り伊利須使主又其子孫八坂郷に住
 居て造の尸骨を賜り八坂造てふ姓と稱ふたり同ト子孫
 の大和國葛上郡日置郷に住居るハ日置造てふ姓と多
 きハ其日置造の家より別きて鳥井てふ地榮井てふ地吉
 井てふ地は居るふハ鳥井宿祢吉井宿祢などいふ姓と多
 きハかり古書ハ日置てふ地の名社の名おど多く見え
 たり

八坂社舊記集錄下卷

繁繼謹撰

疫隅社之辨

疫隅國社昔北海坐武塔神南海神之女子與波比尔坐
尔日暮 此本文疫隅國社と言ふより將免止詔伎まで

ハ備後風土記の文ふる今世風土記全く亡て傳らぬバ
ト部兼方の釋日本紀小引て佚存を再引しをさす

一條兼良公の日本書紀纂疏又谷川士清の日本書紀通證

にも皆釋日本紀小よりて其説を擧げり
天野信景ハ風土
記有和銅延長
兩度撰皆以土俗傳説記といふり又或人の二十二社註式
ハ神社本縁記云と引きよるハ正しく此風土記の文を引

本ハ一條の文を^{見易}からむ為ニ分ちて四章
として舊記の趣ふよりて聊^ちふことを説ぶ一日本書紀纂
疏ハ一説云進雄尊借宿諸神皆不許時有蕪民將來巨且將
來者兄弟也兄貧而仁弟富而吝進雄尊先借宿巨且而拒之
不容蕪民驟出迎而甚勞之餽以粟飯進雄尊大喜欲報之其
夕命蕪民渾家帶茅輪即有大疫除蕪民家皆遭殃亡神且教
云後世疫氣流行于天下時一小簡書曰吾是蕪民將來之子
孫並為茅輪此二物係之衣袂必免矣備後風土記以是為北
海武塔神通南海神女時事武塔神乃進雄尊之別號其祠見
今在備後州曰疫隅社^{といふ}ハ兼良公の時を^{疫隅社}と

稱ひ^し今世^に疫隅社と知る者か^一延喜式
神名帳^に備後國深津郡須佐能袁乃神社^{あり}貞治の頃忌
部正通^が著れた神代卷口訣^に武塔神在深津郡須佐能袁
能神社也^{と言ひ}り日本書紀第七景行天皇二十八年條^に
西洲既謚百姓無事唯吉備穴濟神及難波拍濟神皆有害心
以放毒氣令苦路人並為禍害之藪故悉殺其惡神並開水陸
之徑天皇於是美日本武之功而異愛^し有^り吉備穴海神と
制^し賜^ふ其地^に須佐之男神と齋祀^をま^ひり由古^に
^し小見^えより其社本より備後國安那郡^に有^りる養
老五年四月^に安那郡と分て深津郡と置^しより延喜神名

式小深津郡小町らむせり安那郡多祁伊奈太伎佐
耶布都神社も又之より武塔神の故更ハ佐味郷の更れり
舊記の傳へも亦必葦田郡小有るべし備後國奴可郡
鞆浦の祇園と説へるも亦和名抄此國奴可郡斗意郷
又之をり但し鄰郡なれば後世は地理の沿革も亦
尋ねづし纂疏は一説云と擧げし何書小いづらふ詳
しむ備後風土記の名と出し其一説を記せる書名を
擧げるとおしふ本ハ備後風土記に依りて北海神南海
神の語を刪り多し茅輪小簡の更を采たる後世の雜書小
いづらふ説しむるゆゑ小其書名をいづらふて別説に

ハ非ざるなり然きと借宿諸神皆不許之時と説へるハ神

代卷第七段第三の一書の文意と附會つひあはせなすふ此本

文の故事と當時の更と為るるべし北海ハ南海くわんめい小對

へて言へり此ハ韓國と主ふて山陰道の隱岐國をかけて

九くく言へるふ續日本後紀小兼和九年九月丁巳隱岐國

海部郡宇受加命神預官社又三代實錄元慶八年三月廿七

日戊子授隱岐國正六位上健須佐雄神從五位下と有りて

延喜神名式小隱岐國海部郡宇受加命神社名神大見之

須佐之男尊と祭ると言ふ寛文八年藤原綏てふ人隱州視

村ハ小山の間人家分きて住り後ろに宇津賀明神の社有り素戔鳴尊と祭ると言へり武塔神ハ此文

の下ふ御自ら吾者速須佐能雄神也と詔たまふり然に既に韓國牛頭山小坐して時々皇大御國に往還して妻問ひ給ふるなり故に此書に隱岐國伊豫國れどい言として北海南海と言ひり北海に南海道伊豫國小對して韓國より淡岐國を總て言ひり夏日本書紀第二十七卷天智天皇元年四月の條に釋道頭占曰北國之人將附南國益高嚴破而屬日本乎と有ふて會得まふり皇國中の北海南海との思ふ考のいしらげまふり牛頭の字を韓國の音小早コソラと呼ふと有り延喜神名式に大隅國曾於郡韓國宇豆峯神社見えり今に桑原郡に屬て國府郷大江村にあり備後國ふては古に韓國の

宇豆の音と轉じて武塔ムカと唱へるふやいらんと或人説り近世の人の説に武塔神ハタケアラキノ神と訓へ延曆内宮儀式帳又延喜神祇式に塔云阿良々岐アヲヲキといふ其訓を借りて荒氣アラキの義ミヤウを用ひるなりと説り和銅天平の年間の書籍に延曆延喜の年間の書籍の訓を借りきもいろ、塔と阿良良岐といふに伊勢神宮の忌詞イマコトにアヲヲキ字訓小用ひるき理アヲヲキ阿良々岐ハ蘭蒿の本名アヲヲキふて三重五重七重九重の佛塔いさか蘭蒿の形状アヲヲキを以て忌詞イマコト其名と呼ぶに普通ハタフと呼ぶ日本書紀第二十三卷舒明天皇十一年十二月の條に於百濟

川側建九重塔と古き傍訓ふコ、ノコシノタフと有り和
名類聚抄第十三卷小塔ハ孫愔切韻云齊楚曰塔吐盡層唐
韻云音昨稜反和名太布乃古之と有り此大神韓國牛頭山
に坐をもて武塔神と稱し奉れりと當時その時蕪民將來巨旦將
來兄弟共小徒よ牛頭の地小住居了神とのこととてその
須佐能袁神小坐夏と知ざりてを以て初ふはむ武塔神
と稱ひりや諸書小此文と引ゆる中ふ武塔天神と作つ
る本も有り南海ハ和名類聚抄の古寫本南海國の傍訓ふ
ミナミノミチと訓わり西海國をニシノ南海道伊豫國沖
の三嶋の夏ふて沖嶋中嶋大三嶋を合せて三嶋と言ふ古
夏記は四國と菟紫の中間より引ゆる隠岐

之三子嶋山陰道隱岐嶋の夏あら古より傳て伊豫の沖
嶋とも説けるはてやくより神の往還をまつるよりの名
はこりたりけむ伊豆國の三
嶋も伊豫より初まされたり大三嶋ハ大山積神社たり古
く諸書小記載今の世も盛榮之坐て皆人も知まら
如く此南海以下の語と神社本縁記ハ南海神乃女尔加與
比天彼尔出坐尔日暮多利と作りたりやこ小情進さふる
小似しとハ今ハ釋紀よ引ゆるよに是と引けり

彼所ソ仁將來イ二人在ア伎兄蕪民將來止云甚貧窮弟巨旦將來
止云富饒屋舎モ一百在ア伎爰コ仁武塔神借宿處ハ仁惜シ天不借兄
蕪民將來借奉留即以栗柄ヲ為座ト以栗飯等饗奉既畢武塔神
出坐イ彼所ソハ吉備國と廣く指して言ふ疫隅社の處との

言ふと思ふに狭し將來ハ松浦道輔云く釋日本紀も載
多る此條六むかりの將來の字ハ俱に縣守と誤れりト
部兼方の見ぬる備後風土記の原本既く寫しつやまらぬ
る本よりしる將親紀と寫しはる人の謬誤を詳しめ
と風土記ハ全く亡て後世の人の簞簞内傳とてめ又日
本紀纂疏日本書紀通證牛頭天王辨曆神辨とて皆巨且將
來蕪民將來と作ぬれり所謂二六の秘文のぬむハ縣守の
草書とて縣守の草書おふ似て來字草書とて似ぬるよ
り縣守と將來と謬謬しる夏決し曆神辨ふ曰谷川士清が
説ふ素尊蕪朔生民於將來之寓言也と云つるハ信られぬ

若此説のしくハ巨且將來とてふとる説むと為らむこの
兄弟二人の名いしその訓と知らぬ故に姑字音を用と
いしり縣守ハ天領の官田と守る者と云ふ蕪民縣守ハ備
後國葦田郡佐味郷の邊の官田と守る者なり巨且縣守ハ
備中國小田郡小田郷邊の官田と守る者也といしれど能
當れりや否を知らぬ或人いしらく古ハ新ハ皇朝ハ既化
いしり今來と今木とも書り將來もイマキト訓と云しり日本書紀第十一卷ハ大鷦鷯
天皇仁德六十七年己卯是歲於吉備中國川嶋河洲有大糾
令苦人時路人觸其處而行必被其氣毒以多死亡於是筮臣
祖縣守為人勇悍而強力臨汎淵以二全飽投水曰汝屢吐毒

令苦路人余殺汝蚪汝沈是匏則余避之不能沈者仍斬汝身
時大蚪化鹿以引入瓠瓠不沈即舉劔入水斬蚪更求蚪之黨
類乃諸蚪族滿淵底之岫穴悉斬之河水變血故號其水曰縣
守淵也縣守てふ人名ハ續紀にも冬治比真人縣守有り木
大縣守地名小ハ備中國後月郡縣主てふ郷名有り延喜
神名式小備中國小田郡神嶋神社見之須佐之男尊と
祭了と云ふ此社嶋嶋外浦小有り和名抄小田郡の次ハ甲
乃て即書紀の川嶋をり川面より四里有りといふ續拾遺
集建久九年大嘗會主基方の御屏風ハ備中國神嶋ハ神社
乃て所を中納言資實卿神嶋の波の志ハ
水綿ハゆよくも賢さ御代の例とどふる神代小有ハ
仁徳天皇の御世ハ乃り事實と同一事のミヤハ此

大神の其地ハ鎮坐支ハ笠臣縣守も大神の威徳ハ乃りて
毒蛇と打滅ハ小ヤウラハ上古ハ粟と云ふハ乃りハ
古史記ハ粟國と大宜都比賣と謂とみ之ハ阿波てふ名
の穀物の惣名と云れり之ハ乃て神代卷ハ保食神の願
上ハ粟生まるといひ又粟稗麥豆と陸田種子と為といひ
て麥豆よりも乃て之ハ乃同書ハ粟田豆田の名いて神
武天皇の聖製ハ阿波赴ハ云てふハ又少彦名命
淡嶋ハ至り粟莖ハ縁乃ハ以粟柄為座の説ハ
乃ハ乃風土記ハ伯耆國相見郡の郡家の西北ハ粟嶋乃
乃少日子命粟と蔘生ハ乃秀実離乃乃即ち粟ハ載りて常

世國不渡りす。此故粟嶋といふれど書せり式不伊勢國
度會郡粟皇子神社とのせて儀式帳に粟御子社ハ須佐乃
乎命の御玉道主命れり云ふ又式不志摩國答志郡粟嶋
坐神乎多乃御子神社と云けり能く符合せることにて
まれらち此大神を饗奉るに粟飯と供へるハ深きより
有る傳やることとを知らず唯蕪民の困窮の状と言へり
おもつるハ忌み僻言なりけり近江國ある大比叡神の
鎮坐し此れも其祝部氏の祖某が粟飯を供奉しを本と
して今も四月の唐崎祭の故言とせられたるをも併せしめ
へ一黍稷と祭祀に專不用ゆり漢國ハ上古よりこ

えり

後^ル經年率八柱子還來天詔久我將奉之為報答汝子孫在
哉問給蕪民將來答申久已女子與斯婦侍止申即詔久以茅
為輪令着於腰上隨詔令著即夜尔蕪民與女人二人乎置天
皆悉久許呂志保呂保志天伎 後^ル經年ハ幾年を經ぬ

りけむ其間をかりかへり籩簋内傳ふ天王移彼船須臾到
龍宮城龍王快然奉天王移長生殿合歡頗梨米女餉饗日久
已經三七餘歲得八王子云々と云るハ例の孟浪言なり同
書不又巨旦と誅し給へるに巨旦が靈金神と云りて荒振
ぬることと言へるハ全く八岐大蛇と斬ぬることとを

翻案しつゝ覺るに舊事記ふしの蛇を為八段毎段成雷總
為八雷飛躍昇天と云ふも之を偽に因て偽とせしむる
の甚しきことと云ふべし日本紀舊事紀其外出雲風土記れど
考ふれば須佐之男大神の御子と云ふに八柱に限りをも
ふべし彼宗像の三柱の姫神も天照大御神の須佐之男
命不詔こち給ひて汝子なりと定むすべし八柱といはる此
大神の御子あり決りしものとや此は八柱といはる此
疫隅社不就て由縁ある御子とのと挙げしふにこそあれ
しつゝ神代紀本章は八己貴神を直に大神の
御子と云ふ出雲國造神賀詞は伊射那伎乃日真名字加夫呂

伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神と正し
く並稱へ奉りしとも併考ふべし 率八柱子のし

古事記卷上小櫛名田比賣以久美度迹起而所生神名謂八
嶋士奴美神大年神よりも御兄かることハ大年神等の次
は兄ハ嶋士奴美神云くと云ふて明らなり
日本書紀第一卷小稻田媛乃於奇御戸為起而生兒豨清之
湯山主三名狹漏彦八嶋篠神一云清之繫名坂輕彦八嶋手

命又云清之湯山主三名狹漏彦八嶋野と有り古事記ハ八
嶋士奴美神と作る此神神名帳及出雲風土記等小所見れ
し風土記大原郡小須我社在海潮郷といはる式小同
郡小海潮神社在海潮郷東北須我小川

之湯淵村小在溫泉同川上毛間村川中溫泉出つ清之湯
山主小近一同書小又意宇郡忌部神戶川邊出湯自古至今
無不得驗故俗曰神湯つ式小意宇郡玉作湯神社つ
此神つ三代實錄小湯神つ須我社つ此
玉作の社つ知つ玉作の湯つ清少納言の枕
草つ出つ山川清雅つ名譽の湯つ
ひつ五十猛神大屋津姫命つ古史記つ
紀つ天つ率降つ御母の神
つ詳つ日本書紀第一卷つ素戔嗚尊帥其子五十猛神
降つ於新羅國居曾尸茂梨之處云つ初五十猛神天降之時

多將樹種而下然不殖韓國盡以持歸遂始自筑紫つ大八洲
國之内莫不播殖而成青山焉所以稱五十猛為有功之神即
紀伊國所坐大神是也又素戔嗚尊曰韓鄉之嶋是有金銀若
使吾兒所御之國不有浮寶者未是佳也乃披鬚髮散之即成
杉又披散胸毛是成檜尻毛是成披眉毛是成櫛樟已而定其
當用乃稱之曰杉及櫛樟此兩樹者可以為浮寶檜可以為瑞
宮之材披可以為顯見蒼生與津葉尸將臥之具夫須噉八十
木種皆能播生于時素戔嗚尊之子號曰五十猛命妹大屋津
姬命次孤津姫命つ此三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國
也然後素戔嗚尊居熊成峯而遂入於根國者矣つ有つ式つ

似多れと上古に同名異人なり神代も人代もその
例多けとハ別ニ須勢理比賣の同族兄弟小坐セリ神乃
て古事記も云くと載らむも有はしと於よく辨
ふへ大年神宇迦之御魂神に速須佐之男尊又娶大山津
見神之女名神大市比賣生子大年神次宇迦之御魂神と
り式小伊勢國安濃郡大市神社乃り和名抄大和國城上郡
に大市郷於保伊智有り此地名ハ崇神紀ニ倭迹迹日百襲姫命
葬於大市と云之垂仁紀も大倭大神祠於大市長岡岬
と云之り式小山邊郡石上市神社も云之り此外和名
抄小参河國碧海郡播磨國揖保郡備中國窪屋郡等も大

市郷於布智見之りいばも此神小由縁あり地と覺り式

小大和國高市郡大歳神社二座御歳神社鉞乃り又葛上郡

葛木御歳神社名神大月次新嘗古事記小大年神娶イミカハ香用比賣生御

年神と云之古語拾遺小大歳神の御子御歳神と云之云

に此御歳神の名神は列り大幣又月次新嘗の祀りに預

り給ひ大歳神に却りて小社の列小おとり又祈年祭祝詞

も御歳神の擧げて大歳神と言はばいとつづ

れと又神祇官西院坐御巫等祭神二十三座の中小此御歳

神と云く載せられずは祈年祭とひ稱せられ帳小

ハ似つらりか好まやうか此ハ古人も論らひま

言あれども母聊いづらかり置ふやむ宇迦之御魂神ハ古
事記上の須佐之男大神黄泉比良坂ふて大穴牟遲神小詔
多岐比良大御言ふ為大國主神而云々於宇迦能山之山本
而居とのをまひり地名小就つる神ふまゝてのち式小出
雲國出雲郡宇迦神社なり是ハ出雲國出雲郡小宇迦郷乃
り此郷の西の方小宇迦山あり御崎山ふはげけり式小同
郡小御崎神社なり後世小鰐淵山と呼つるハ此宇迦山の
変なりと云賀茂の祐之縣主の説ハ神代紀の保食神の故
事ハ此宇迦之御魂神のこゝと云々と言つる鈴屋翁の天熊
之大人と天穗日命の御子大背飯武三熊之大人也と言ハ

るに通ハいてよく聞えり神代紀ふ又飢時生兒孺倉稻
魂命倉稻魂此云宇
一个能美拖磨と有る伊弉諾尊の御子なりとハ同名
異神の支いちぢふ延喜神名式小所見つる伊豫國越智

郡大山積神社名神大の神女と娶りたまはるハ論ヤ此御
社小

十六の末社有りそれハ内宮儀式帳ふに之
より大山罪神の御子ふて大市姫も其中あり伊豆國賀

茂郡伊豆三嶋神社名神大月
次新嘗同郡伊古奈比咩命神社名神大同

郡阿波神社名神大此神又伊豫三嶋神と同神ふまゝて新小

造作の嶋の神天武紀十三年仁明紀美和七年の條ふも之
えて靈驗盛小御座し事いよも尚新々しにらふ伊豫

風土記小宇智郡御嶋坐神御名大山積神是神者津國御嶋

坐あり式小攝津國鳴下郡三嶋鴨神社有る或人これと
事代主神と云ふハ非なり和名抄伊豫國越智郡鴨部なり
て鴨てふ名も本より三嶋神不属ふる名なりさて伊豫も
伊豆も皆南海ふるハ勿論也須世理毘賣神のことハ
古事記上大穴牟遲神の黄泉國小参りて給ひ一段ハ詳
に云せり須佐之男大神の詔言小其我之女須世理毘賣
為嫡妻而云くハ之式小出雲國出雲郡杵築大社名神同
社大神后神社又神門郡那賣伎神社同社坐和加須西利比
賣神社なり大板祝詞小根國底之國ハ坐速佐須良比咩登
云神云々鈴屋翁ハ佐須良と須勢利と音通なりと言へり

此言尤もつれづれの八柱神等ハ疫隅國社の事小就
きて殊小功用あり神なり

我將奉之為報答ハ奉之の字率之の寫誤なりむらむら
て此八柱の御子神を率て前小蕪民ハ真心をもち御饗
仕奉りハ小ハ善をもて報ひ幸福ひむらひ巨且ガ強暴悖
逆なる情もて疏却け奉りハ禍惡をもて離れ滅亡
をまむれり九を天災物妖の禍害にもとより神の御
意より起さる物なら其實ハ天道ハ還さるると好給ふ
自ず理ふして善小福ハ淫小禍ハ天網恢々疎ふして失
ハぶることを教諭ハ大法言を畏奉りて戒慎恐

懼まじきものなり汝子孫在哉問給ふハ子孫の八十連屬
まがども守り給はむと神の御意なり己女子與斯婦侍止
申ハ己ハ蕪民自ら言へり女子の名此所小見之祢と佐美
良比賣と稱し古くは言へり日本書紀第九
卷冲哀天皇九年皇后氣長足姬尊への神託小幡菽穗出音
也於尾田吾田節之淡郡所居之有也とありて十月皇后遂
小新羅國と伐こり終りて明年二月穴門豊浦宮ふりつり
ま其宮より御船小来りて直小難波小むらひ給ひり時
又神託ありて稚日女尊誨之曰吾欲居活田長峽國とあり
延暦廿三年の大神宮儀式帳管神宮肆院行事の條小伊雜

宮一院 在志摩國答志郡伊雜村 大神宮相去八十三里 稱天照大神遥宮 御形正殿

一區御床一具云々然て伊雜宮遷奉時裝束合十四種次

條小佐美良神祭行事御饌指丸束 從伊雜宮下宛行 又管度會郡神

社行事合四十處之條小粟御子神社一處稱須佐乃乎尊御

王道主命形石坐 倭姬内親王定祝 と有り式小志摩國答志郡粟嶋

坐伊射波神社二座 並大 同嶋坐補乎多乃御子神社又伊勢國

渡會郡粟皇子神社見之とあり伊射波ハ即粟ふて稚日女尊

と齋奉り一座ハ佐美良比賣命ヤハ神乎多御子ハ即

ち粟皇子ふて須佐乃乎命の御魂小坐とり式小隱岐國海

部郡奈伎良比賣命神社宇受加命神社 名神大 宇受加ハ須佐

乃乎尊小坐支前いづるが如し奈伎良ハ佐美良と通一宇
受加ハ伊射波と通一奈伎良の伎一本
許呂志保呂

保志天伎纂疏小即有大疫除蕪民家皆遭殃亡と書一本朝

神社考小其夜疫病大行と書れ一本文の許呂志保呂

保志を孰ももしれ疫病の所致との見をるハいととき

是ハ古事記小所謂悪神之音如狭蠅皆満萬物之妖悉ハ

護とらると同く三災七難競起と云飢饉疫厲自界救逆

他國侵逼と云ふもさうとり崇神紀思ひ併と一

即詔久吾者速須依能雄神也疫氣在者汝蕪民將來之子孫

止云天以茅輪著腰上隨詔令著即家在人者將免止詔伎此

大御神といはる武塔神との詔をまひて実の御名

と頭給とば蕪民も曩昔ハ徒小牛頭の地小鎮り給ふ

神との詔をて実ハ須佐之男神坐とと悟り知ら

がれも厚く饗奉り蕪民夫婦誠心と感一且蕪民夫

婦の向後の昌盛と幸ひ給とむとて此時小ららちて御自

ら実の御名を告げ給ひりり此大神と牛頭天王と称

奉る御名の故ハ上卷小も委といつるかと素莖鳴

尊居曾尸茂梨之地とらる曾尸茂利ハ即て牛頭の韓語小

て樂浪牛頭山と言ひ天王ハ彼國小下の尊称ヤる物ハ

ら皇大御國小遷一齋奉りても常小称唱一とりり此

牛頭の称とらら得誤りて彼の神農氏の牛首人身ふ附
會一又ハ月令の土牛大讎の説とらりて牛御子牛御前等
の事と作り出せり兵範記ふ載られ日吉の牛御子ふ叙
爵ありハ小右記の猫の乳母ふ馬命婦といつ同一
笑の事さづづ中昔よりさふハ此類多一怪ひふふ
らび疫氣在者ハ其社と疫隅社ハ呼ふ就き若此詔
ふさひされどもも蕪民が古事に疫病ふさりを
らにつらぶ九て種々の禍害ハ時を指し給つる上の
語ハ相て知るハ

茅輪の事我國ハて神社ハ茅を用ゆ事神代紀の茅纏之

猶もハハ其明潔ハと取まるるハハ古語拾遺
ハハ著鐸之茅ハ作り大和の三輪の祭ハの日三の茅輪
と懸る支物ハ見える日吉社ハも三の茅輪と三輪金光
ふ附會ハといつとハ六月晦日の大被ハ茅輪と越る
事中昔よりハ以來の支ハれハ全ク此風土記の文より起れ
りハ覺ゆ新千載集入道前太政大臣年ハのハと
今宵ハの輪ハ管ハらりて七十ハと経ハ詠ハ給ふ
是ハ和名抄祭禮具ハ葦索ハ祭ハ獨断ハ曰懸葦索於門
戸ハ以禦凶也阿之乃とハ是ハ禮記左傳等ハも見える蒨
葦草のハ不祥を掃ふに取まるるハハ松浦道輔ハ

の説ふくくく茅を以て輪を為さしめ給ひし此大神の御
意ハ輒く白く奉り難ひきと近く言ふも、蕪民が住居る葦
田郡ハ其名ふ呼ぶ許り最吉と葦葦の多く有る地なれば
其茅草と取て輪ふ作り前ふ為し如く腰上ふ著すと詔ふ
物り然れハ疫隅國の名義ハ葦田佐味國てふ言みて疫病
又瘧ともエヤとて呼ハ本朝古方ハ其等の病を治むるに
蘆根と主ふて白薇知母黄蘗白草楊梅皮等を加へ用る
方法有る葦根と用て直る病を治むる故ハアレノエヤとてふ
義ハも有るべし、鯉魚と用て治むる病を鱸と呼ぶ類也と
此説りくまじくや否と知らば讀人よく辨してよ

此書者就傳來舊記聊拾掇逸文
引證國史諸書表章正說略述當
社御緣由名曰八坂社舊記集錄
也予雖不肖爲祠官奉其職而不
知其明實不詳其起元恐怠慢之
責難逃者歟多年痛心日夜考究
之爰松浦道輔翁者予之舊友也
以醫爲業旁精思於皇國學掌

於當社之事盡於心亦有年矣文
久之間原於我社傳論著自所發
明爲書四卷其事詳而其說富不
易刊布之更欲採其要而別爲一
書焉有志未果慶應二年秋九月
物故四年戊辰之春
王政復古是歲夏六月依
勅 八坂神社御改號有之誠子

歲一遇此則

大御神之御稜威亦光顯於四海
者也當斯時有懈怠者神慮實亦
有深恐焉特

盛代之化神道習學可專之旨豈
可忽哉因不揣淺學所已意約爲
三卷以便於童蒙庶乎報
神恩之一助云爾

212
2
181

明治二己巳秋八月

紀朝臣繁繼

謹撰



